

チャカさん・高木先生を偲ぶ

— 登山家 高木正孝 没後 50 年 —



1961 年 12 月 氷の山千本杉ヒュッテにて

2011 年 3 月 9 日

「高木先生を偲ぶ会」世話人
(神戸大学山岳部 OB 有志)

チャカさん・高木先生を偲ぶ

— 登山家 高木正孝 没後 50 年 —

神戸大学山岳会

神戸大学山岳部 100 年の歴史において、私たちは 3 人の偉大な指導者をもった。その最初の一人は経済地理と氷河の学者であった田中薫先生（1898～1982）である。先生の先見と主導によって 1958 年、日本・チリ合同パタゴニア探検隊が組織された。

そして、その時活躍してアレナレス峰初登頂へと導いたのが、2 人目の指導者高木正孝先生（1913～1962）である。社会心理学の気鋭の学者であると同時に、当時の国家的事業であった第一次マナスル登山隊の登攀隊長であり、ヨーロッパアルプス本場仕込みのアルピニスト、世界一級の登山家であった。

3 人目の指導者が平井一正先生（1931～）である。チョゴリザのサミッターとして日本の登山家で知らない人はない。1964 年システム工学の教官として、神戸大学に赴任、シェルピカンリ、クーラカンリ両峰初登頂という快挙を成し遂げた。中国地質大学との東チベット合同登山等、半世紀にわたり日本の大学登山界に果たした貢献は測り知れない。2010 年瑞宝中綬章叙勲。

本稿は 2 人目の指導者高木正孝先生の記録である。岩波書店『パタゴニア探検記』の著者として一般に知られる高木正孝とはいかなる人物だったのだろう。先生逝って 50 年、青春の日は遠く去り、学生時代に教えを受けた私たちはすでに老境にあるが、その謎は砂漠のスフィンクスのように深まるばかり。そこで、2010 年 11 月 18 日、平城遷都 1300 年祭が行われていた古都奈良西郊の地百楽荘において「高木先生を偲ぶ会」が企画された。出席者は以下の 20 名である。

円満字正和	森田暁*	直木嘉也*	山内敦人*	林市雄
福本桂三*	村上勝	田中俊甫*	柏田紘一	岡市敏治*
田中信行	小谷辰雄	鷲尾孝二	川越靖曠	寺倉誠二
高田和三	有馬誠	坂西俊一	井上達男	山田健

*印は「偲ぶ会」世話人

目次

第一部 序章	3
はじめに	3
『登山家高木正孝』を執筆して	3
第二部 躍動の時代	4
高木先生が生きた時代	4
高木先生のおじいさん	5
第二次世界大戦下のヨーロッパで	6
高木先生から教えられたこと	7
第三部 パタゴニア	9
チャカさんのエピソード	9
危険への衝動	10
ノブレス・オブリージ	12
高木先生の印象	12
パタゴニアのチャカさん	14
第四部 終章	15
謎の失踪	15
未知を求めて	17
第五部 年表 高木先生が生きた時代	18

第一部 序章

はじめに

司会（岡市）：みなさん今日は。只今より『高木先生を偲ぶ会』を始めます。「チャカさんとパタゴニア」これは私たち山岳部、青春時代の最大のキーワードです。ヒマラヤやチベット処女峰へと向かった神戸大学山岳部、山岳会のその後の 50 年の歴史はパタゴニアにその原点があります。その中心にいた高木先生・チャカさんとはいったいいかなる人物なのでしょう。

ここに、三省堂の『日本人名辞典』があります。卑弥呼から聖徳太子、夏目漱石まで、14,000 人の人物紹介がのっています。試みに「高木正孝」と引くと、なんと出てくるのです。それならと、田中薫先生や元学長の古林喜楽、新野幸次郎先生をいくらひいても出てきません。高木先生は日本史上の日本を代表する人物の一人なのです。少なくとも昭和という時代を代表する、偉人か奇人か変人であることは間違いないでしょう。本日はそのチャカさんを肴にして、楽しくお酒を飲もうという会であります。

世話人代表（森田）：私らも年をとって、もう山には行けんようになった。しかし、なんといっても山が一番の思い出です。円満字さんが『高木伝』を書いて 3 年たった。円満字さんを囲んで、高木先生の話をしてしようじゃないかということで、今日の会になりました。岡市君は日本史上の有名人とかなんとか言ったが、先生には破滅的なところがあった。皆もそれに惹かれるところがあったのではないか。魅力的な人でした。まあ、楽しくやりましょう。

山岳会会長（井上）：昨年の東チベット・カンリガルボ山群未踏峰初登頂は、世界的にも注目されています。これは神戸大学の未知を求める長い伝統、DNA の賜物です。私は円満字さんからパタゴニア氷河でのセラック地帯突破の怖さについて聞いていたが、現実にはヒマラヤの氷河でセラック帯に直面し、そのことを思い出し、身を引きしめた。このように DNA は引き継がれていくのだと実感しました。2015 年は神戸大学山岳部 100 周年です。100 周年で皆さんと再会できるのを楽しみに。

『登山家高木正孝』を執筆して

円満字：私たちにとって高木先生は雲の上の人だった。

1995 年の『山と人 80 年』史が出て、ボリビア遠征のリーダーシップ問題が再燃、「高木先生の山登り」が話題の中心になった。山岳会で高木先生の登山観をまとめようということになり、会員の協力を得て、1998 年から資料を集めを始めた。

渡辺兵力さんには3回会った。田口二郎夫妻の紹介で先生の心の友園城寺礼子さんにも会って話を聞いた。2007年に『登山家高木正孝—その人生とアルピニズム—』(Voyage dot Book's)として出版した。変わった人でとても描ききれものでもない。

高木先生は登山家としては一流、最高の登山家だったと思う。山に対しては慎重で、アレナレスでセラック帯を突破するときのこと、スペイン系の隊員たちはそれいけドンドンだったが、先生は慎重の上に慎重で、無謀な突破を強くいましめられた。

ところが、私生活となると行き当たりばったりで、慎重さを欠く行動が多い。女性に関しては特にそうで、スイスのマドレーヌとの出会いと別れ、帰国してからの道さんとの道行き、園城寺礼子さんとの交遊など、およそ一貫性がない。先生の人間らしさが出ているといえはいえるのかもしれないが。

先生は、酒を飲むと一転陽気になる。パタゴニアでも逸話にこと欠かなかった。アレナレス初登頂を終えて、サンチャゴへの帰還の途時、現地の陸軍駐屯地で連隊長が祝宴を開いてくれた。若い士官ら15、6人も一緒になって一気飲みが深夜までつづく。チャカさんがこんなに酔っぱらったのを見たのは始めてである。翌朝がタイヘンだった。宿舎の前に衛兵がズラリと整列している。門は閉まっていた。いきなりチャカさんが「go straight!」と叫んで門をよじ登り始めたのだ。私たちは必死で抱きとめた。

とにかく、人間的な魅力に富んだ巨大な人物だった。矮小な私らには理解することは難しい。

第二部 躍動の時代

高木先生が生きた時代

司会：高木先生は大正2年に生まれ、昭和37年に亡くなります。西暦でいえば、1913年から1962年、49年の生涯です。この半世紀というのは、日本史2000年の歴史で、もっとも過酷な50年でした。700年前の二度にわたる元寇は、わが国を恐怖のどん底につきおとしたが、何とか神風でしのいだ。しかし、世界を敵にまわした太平洋戦争では神風は吹かず、2個の原爆をくらい、大阪、東京は焼け野原となって、300万人もの人命が失われました。

高木先生は昭和13年、25歳で単身ヨーロッパに渡ります。留学先のドイツはヒットラーの制圧下にあった。終戦をスイスで迎える。そのとき32歳、日本へ帰るに帰れず、戦中戦後の滞欧9年間を通じて、寸暇を惜しんでヨーロッパアルプスの岩稜と氷河に登攀しました。この日本人として稀有の体験が、日本のマナスル隊初登頂へとつながっていくのは、まことに壮観であります。私たちは傑出したこの稀有の人物と昭和28年からの9年間、生身で接する幸運を共有することになりました。

ところで高木先生は、自分の出自についてはおろか、自分自身について語ること、きわめて少なかった人です。そのため円満字版高木伝の執筆は困難を極めたわけですが、実は

高木家の家系について直木さんが独自に調査されました。その成果は「高木先生の系譜」として ACKU ニュース 26 号に掲載されました。直木さん、高木先生のおじいさんについて聞かせてください。

高木先生のおじいさん

直木：高木先生が男爵家の出であるとか、慈恵医大の創立者の家系だと言うことは、若い時から耳にしていた。只それが単なる噂なのか事実なのか知らなかった。そこで 10 年前調べたことを、これからお話しします。

正孝先生の祖父兼寛先生は、海軍軍医総監であり、慈恵医大の創立者であり、我国初めての看護婦養成学校の設立者であり、帝国生命（現朝日生命）の設立にも参画している。しかし、氏の最高の功績は、日本軍人の難病であった脚気を海軍内部から消滅させたことである。しかしこの事実は、外国では極めて高く評価されているにも拘らず、日本では正当な評価を与えられていない。氏が偉大な医学者であることすら一般には知られていない。

高木兼寛は幼名藤四郎といい、嘉永 2 年、日向国東諸県郡むか佐村（現宮崎県高岡町）に生まれた。高木家は薩摩藩下級武士とも大工ともいわれている。20 才で薩摩藩九番隊付属医師として戊申戦争に従軍し、会津若松城の攻防に参加している。明治 5 年 24 才で海軍病院医員となり、8 年英国セントトーマス病院付属学校に留学、13 年同校を主席で卒業、帰国し中佐待遇で海軍病院院長となる。14 年医師の養成を目指し成医会講習所を開設、所長となる。これが慈恵医大の前身である。

当時、軍人の疾病中最も多かったのは脚気であり陸軍より海軍のほうが発生は多かった。海軍の場合、洋上に於いては病気による欠員の補充はできず、場合によっては戦闘能力が全く失われることすらある。明治 10 年から 14 年の統計では、海軍総兵員の 30 数%が脚気患者であった。今日、脚気の原因はビタミン B の不足であることは誰も知るところであるが、当時ビタミン B は発見されておらず、風土病の一種のように思われていた。

兼寛は脚気の原因は栄養にあるらしいこと、蛋白質と含水炭素の適切な比率を採ることにより防げると考えた。明治 16 年、軍艦龍驤のオーストラリア、チリ、ペルーへの 9 カ月に及ぶ航海で、乗員 378 名中 169 名が脚気にかかり、23 名が死亡するという事件が起こった。このままでは海軍は脚気で滅びると兼寛には思われた。よく 17 年、軍艦筑波の航海に際し、前年の龍驤と同じコースを取り、食餌を兼寛の作った肉・卵などの多い献立にして、実験航海が行われた。そして遂にハワイから「病者一人もなし安心あれ」という電報がもたらされたのである。

兼寛はこれらの結果を論文として医学雑誌に公表した。これに対し、翌月の同誌に東大の緒方正規から脚気は細菌の感染によって起こるという反論が直ちに行われた。陸軍で兼寛を攻撃したのは、一等軍医・森田太郎（後に陸軍軍医総監、文豪・森鷗外）であった。東大や陸軍では、ドイツに医学修行の為、続々と人を送り出していたから、ドイツ医学を世界最高のものと信じ、兼寛の脚気食物原因説が学問の理論的裏付けのないことを攻撃し

た。兼寛は医学会では完全に孤立してしまった。

明治 37 年、日露戦争が起こった。海軍は米麦混食の原則を守り、脚気の軽傷者は出たが、重傷者は全く出なかった。これに対し、陸軍では恐るべき数の脚気患者が発生した。陸軍の戦死者 47,000 名、傷病者 352,700 名、その内脚気患者 211,600 名。傷病者のなか死亡したもの 37,200 名、その中、脚気で死亡したもの 27,800 名。古今東西の戦役中類例を見ざる戦慄すべき数であった。脚気一病が大会戦を上まわる死者を出しているのである。

明治 38 年、兼寛はアメリカ・コロンビア大学から日露戦役の前線の衛生について講演の依頼があり、渡米した。そこで自分が、脚気を予防する方法を見出した偉大な医学者として尊敬を受けていることを知った。大統領ルーズベルトに会い、フィラデルフィア医科大学から名誉学位を送られ、ジェファーソン医科大学からも講演の依頼を受けた。さらに英国に渡り、セントトーマス病院で三日間にわたり脚気根絶にいたる講演を行い、大きな歓迎を受けた。

南極に高木の岬と名付けられた岬がある。付近の地名は医学や栄養学に大きな貢献のあった人の名がつけられている。日本人の名がつけられているのはこの岬だけである。英国の極地研究所からこのことを知らされた日本の極地研究所は、高木とは誰のことか誰も知らなかったという。

さて、高木兼寛の小説のような生涯は実際小説になっています。吉村昭著『白い航跡』（講談社文庫）です。最後に、高木正孝先生までの高木家の系譜について簡単にふれておきます。高木兼寛、富夫妻には四男二女がいた。次男兼二は明治 14 年、東京高等師範付属中を出て、キングスカレッジ、セントトーマス病院附属医学校卒、慈恵医専教授、東京病院内科医長、30 歳にして学位を受けたのは氏が初めてのことです。夫人は男爵・神田乃武次女・百合で二男三女あり、次男が正孝先生です。兼二は大正 8 年、腸チフスで没、享年 39 歳。父君が亡くなられた時、先生は 6 才でありました。

司会：今、NHK で司馬遼太郎の『坂の上の雲』が放映されています。ご存知のように、日露戦争が主人公の大河ドラマです。ロシアのバルチック艦隊に完勝した日本海海戦の英雄は、東郷平八郎と参謀の秋山真之だと思っていたが、縁の下の第三の英雄がいたのですね。それが高木先生のおじいさんだとは、今の話で初めて知りました。

第二次世界大戦下のヨーロッパで

円満字：東京帝国大学を卒業した高木先生は、昭和 13 年 25 歳の時、フンボルト財団奨学金を得てベルリン大学へ留学します。そして翌 14 年から 19 年までカイザー・ウイルヘルム人類学研究所に在籍する。全ヨーロッパで破竹の勢いだったドイツ軍も 16 年 12 月にモスクワの冬将軍に敗れて以来、撤退につぐ撤退で、昭和 19 年になるとベルリンの空爆も激しくなってきた。4 月にはスイスへ退避することになり、スイスのベルン日本公使館勤務となる。ここで公使館の同僚のマドレーヌと知り合い結婚する。やがて終戦。

スイス、ベルンに落ち着いたチャカさんは本当に幸福だったろう。なにしろ西アルプスのど真ん中に位置している。親友の田口二郎がいる。二人に山へ行くなというのは無理だ。彼らは憑かれたように休日は山へ出掛けた。そして家には愛するマドレーヌが待っている。

日本は敗戦で塗炭の苦しみを受けているというのに彼らにはどうすることもできない。敗戦で日本人のパスポートは無効となった。帰国の道は閉ざされたが、在ベルン朝日新聞の長老記者笠信太郎氏の尽力で、パナマ経由の3カ月の船旅で昭和23年2月、マドレーヌをともなってチャカさんは無事帰国する。だが、当時の日本は東京も大阪も一面の焼け野原にバラックが建つ程度で、街には浮浪者があふれ、闇市場がにぎわっていた。上流階級も下流もなく一様に食べるのが精いっぱいだった。

スイス、ベルンの静かな古都から騒然たる敗戦国日本にやってきたスイス人の若妻にとって、これは大きなショックだった。加えて予期しなかったカルチャーショック。マドレーヌのフラストレーションは我慢の限界を超えた。昭和26年8月、二人はスイスへ飛び立つ。

チャカさんはカイザーウイルヘルム研究所で再び働くつもりだった。だが研究所は東ベルリンにある。東ベルリンはソ連の占領下であり、西側からの交通は全く遮断されていた。カイザーウイルヘルム研究所に復職することは不可能だったのだ。マドレーヌはスイスに残り、チャカさんは昭和27年2月、一人で羽田に降り立った。泣く泣く二人は別れたのである。

マドレーヌと別れ、傷心のうちに日々を過ごすチャカさんに、ふってわいたような幸運の報せが届いた。当時の国家的事業であったマナスル登山隊への参加要請である。2回のマナスル遠征を経て、昭和28年の秋、チャカさんは神戸大学山岳部に登場する。『山と人』第一号に岸本卯三郎君が書いている。

「強力な指導者の存在しなかった我部に、まるで降ってわいたかのように高木正孝先生が部長に就任されることになった。部にとって非常に強力な一つの指導力が生まれたのである。わからないことがあると部長に相談した。部長は的確な助言を与えた。こうして今まで可成りばらばらであった部が、一つの組織へと徐々に固まっていったのである。」

高木先生から教えられたこと

村上：私は昭和32年の入学で、2年生のとき高木先生と保塁岩に行った。見事なバランスクライミングでアブミを使うときは少し重たそうだったが、とにかくカッコよかった。尊敬の念を抱いた。

ガストン・レビュッファールの『星と嵐』という本で、ヨーロッパアルプスの岩壁を登るアルピニストの写真に憧れていたが、あれとそっくりだと思った。

高木先生は本当に別世界の人のようだった。ドイツ語を母国語のようにあやつり、その行動や振る舞いに日本人離れしたところがあった。

昭和 37 年、タヒチに学術調査に行かれるとき、前田、豊田さんらと羽田へ見送りに行った。あれが最後となった。

柏田：私は昭和 33 年の入学で俊さんと同期です。高木先生は雲の上の人だったが、当時の山岳部はいい雰囲気、山内、東郷、水口、豊田、福本さんらの諸先輩から多くのことを教わった。それが人生の支えになっている。ずっと教員をつづけて東郷校長のときの教頭もやり、腐れ縁みたいだが、いい人生だったと感謝している。山岳会員として長いこと会費を払ってきた。これからも総会に出て会費を払う。私の人生です。

田中信：昭和 34 年入学。高木先生にはいっぱい教わった。入学当初は姫路分校で、部員が 20 人もいて、上級生はおらず、勝手な岩登りをしていた。雪彦山で同学年の大平と岩登りをしていて、途中で動けなくなり、暗くなったのでビヴァークした。下のテント村では大騒ぎになった。後日チャカさんが分校に見えて怒られた。「山で死んではいかん。そのために何をするか。いかにリスクをコントロールするかだ。」

2 年生の春山は北岳で特訓を受けた。私がトップのとき、かけ足で雪壁を登ったら、「もう一度やり直せ」と怒られた。「下る時のことを考えて足場を切れ」と。

卒業するとき、「就職したら山登りはムリかな」といったら、先生は「山登りも人生もいっしょだ。何ごとにおいてもパイオニアワークを忘れるな。」と。先生の教え通り、会社でも新規開発を果敢にやった。高木先生の教えは、私の人生のすべてだと思う。

2007 年、パタゴニアへ言った。共に年金生活者となった壺阪祐三、川越靖曠、高田和三、有馬誠、本沢武次との 6 人組で、東のアルゼンチン側から水上飛行機をチャーターして、アレナレスへ向かった。コロニア氷河の上を機は何度も旋回してくれた。朝日と夕日に輝くアレナレス峰をたっぶり堪能して帰ってきた。一人 200 万円近くかかった。いくつになってもパタゴニアの DNA が騒ぐ。

小谷：昭和 34 年入学。信さんや岡市と同期。高木先生は私が知っている人の中で最も立派な先生。それで今日来た。

1 年のとき、トレーニングのあと、御影分校でソフトボールをやった。高木先生が「小谷、お前は何番か」と打順を聞かれた。ラストだったので、「ベッタです」と答えた。「ピッタシじゃ」と先生いわく。以来「ベッタ」が通り名になったが、名づけ親は高木先生です。

2 年、北岳での春山合宿。稜線で歩きやすい雪面を歩いていたら、高木先生に怒られた。「こっちへ来い。そこは雪尻の上じゃ」

パイプをくわえて岩登りをする先生はなんともカッコイイ。ところが山では人の通る所でも、平気で平然とキジ打ちされる。以来私も散歩の途時、河原で平気で野クソをうてるようになった。この教えは今も守っている。

教育学部を卒業のとき、「教師はガラでない。教師はやめよう」と思って高木先生のところへ相談に行ったら、「学校の先生は時間がある。山に登れるぞ」といわれた。それで教

師になった。別に教育に情熱があったわけではない。型ハズレな教師やったが、教師をやってよかった。あんな立派な先生があんな形で他界されて残念です。

鷲尾：昭和 35 年の入学。円満字さんの本で高木先生の全容を知りしみじみと感じている。1 年の夏山剣沢合宿で始めて先生とご一緒させて頂いた。六甲の保塁や不動岩、雪彦で岩登りを教わった。3 年のときにポリネシアに学術探検に行かれ、新聞で「失踪」を知った。1 年後に御影の公会堂で大学葬が行われ、山岳部代表で弔辞を読んだ。非常に偉大な先生だったと改めて思う。

第三部 パタゴニア

チャカさんのエピソード

寺倉：昭和 35 年入学、鷲尾と同期。1 年生のとき、上級生の使いで高木先生の研究室へ行った。ノックして部屋に入ると、パイプをくわえて窓際で洋書をもって立っている気品のある先生が目に入った。大学の先生とはこうかとオーラを感じ足がふるえて何を話したかうわの空だった。

住吉寮の 2 寮 19 室（木造二階建、階段の上の 2 階にあった）は山岳部の寝ぐらだった。自宅に帰りそびれてそこで寝てたら、夜中に高木先生が酔っぱらってやってきて、俊さんの汚い布団の上にあぐらをかいた。皆で安酒を飲み、「おい小便だ」と先生。六さんが窓枠に登ると、先生も窓ションをした。皆そろって窓ションをした。そろそろ夜が明けようとしていた。

山内：去る者は日々に疎しというのが、高木先生の姿は一向に消えない。円満字さんの「高木伝」はよくあれだけ多岐にわたり読みやすくまとめられすごいと思う。高木先生がよみがえってくる。

チャカさんに接した多くの人がチャカファンになった。チャーミングな風貌もさることながら、心の底から優しい人だったのだと思う。それは円満字さんの本を読めばわかる。

岡市や寺倉やベッタの世代は先生の「息子たち」にあたる。どら息子たちの成長はチャカさんの大きな喜びだった。ファッヒバでなぜ息子たちのことを思い出してくれなかったのか、痛恨の極みだ。

直木：はじめて高木先生と山行をともししたのは 1955 年 3 月の西穂高の冬山であった。われわれは冬の穂高は初めてだった。初めて経験する雪のやせ尾根であった。尾根の幅は一尺ほどである。毎晩雪が降り積もり、毎朝三角形のとがった雪稜ができあがる。朝の第一歩はその尖った尾根の上に足をおろすことになる。岳沢側は百メートルぐらいすばっと切れた断崖である。飛驒側は数百メートルの急傾斜で、もしスリップすれば石ころのよう

にすっ飛ぶであろう。いずれにしても命はない。毎日が緊張の連続だった。へっぴり腰で歩くわれわれを尻目に先生はピッケルを小脇に抱え、パイプをくわえて盤石のように安定した姿で歩いていた。我々と全然レベルが違うとしか言いようがない。まさに男の姿であった。

先生についてのエピソードをいくつか紹介しよう。ドイツ留学中のこんな話を先生から聞いた事がある。スイスだったかで下宿しているとき、宿屋のおかみさんと仲良くなった。それを知った亭主が包丁を持って追っかけてきたというのだ。みんなで抱腹絶倒した。

こんなことがあった。1956年のある日、山岳部員であった私の須磨の家へ高木先生と道夫人が早朝訪ねてきた。先生が「昨日の午後、俺の研究室にお前が一緒にいたな？」と言う。「ハイ」と返事をすると「よし」と道夫人を振り返ってすぐ帰られた。わざわざ電車に乗って遠いところまでなにしに来られたのか。私はチンプンカンプンだった。隣の部屋にいたおやじが、「お前何か疑われているのか」といった。

道夫人が研究室での先生の女性関係を疑ったらしいということが後日分かった。このころから道夫人は異常な行動をとることが多くなり、道夫人の精神が正常でない事は身近な人は皆知っていたようである。

田中俊：私は学問的な話をする。私の卒論は「青年期の危機感」で華嚴の滝に身を投じた藤村操の「自殺論」がテーマだった。論文を書いて先生の所へ持って行った。「自分が自殺せにゃ、あの論は成り立たんよ」といわれた。

山岳部の六さん、私、二つ下の大石は住吉寮 2 寮 19 室が生活の場だった。ある晩、先生がやって来られ酒盛りとなった。すっかり酩酊された先生は、その夜は六さんの布団でお休みとなる。翌早朝、大石が伝令役として歩いて 5 分程の鴨子ヶ原の高木家に行ったら、奥さんがネグリジェ姿で出てこられた。驚いた大石が息せき切って駆けもどってきた。

先生を雲の上の人というが、こういうこともあって私らは先生を結構身近に感じていた。

怖いのは監督団のほうだった。団長の円満字さんを私らは天皇と呼んでいた。丹波さんが侍従長で、金井健二さんが皇太子だった。2～3 年あとの世代は監督団をみそくそにいうが、私らは天皇の言うことを間違いないと信じていた。

危険への衝動

司会：高木先生は 49 年の生涯を今から 48 年前に終えられました。とすると、生きておられれば今年 97 歳になられます。老いさらばえ、長い長い生を終えて、うやうやしく墓地へと運ばれるチャカさんを、私たちは想像できるだろうか。49 年の颯爽とした目もくらむようなハイスピードの人生、これは先生にとって必然ではなかったか。これはこれで見事に完結した人生ではないか。先生には魔神的なものへの憧れがあったのではないか。円満字著『高木伝』230 ページに「危険への衝動」の見出しで、林さんとマイエルの詩*のことが書かれています。

***マイエルの詩 『行為と夢想』 *Tat und Traum* O. E. Meyer**

山の情熱を胸に宿したひとりの若者が、きりたった岩盤で夜を迎えた。

ぱくっと口をあける氷河のずっと上の、せまい岩棚で彼は朝を待った。ぐっすり眠りこんでも落ちないようにザイルを岩にかけた。

まどろむうちに、山の奥から、にぶい声が彼の耳もとにきこえてきた。

「わしは生と死をにぎっている。おまえは高山で若い命をおとしたいのか？それとも、都会の巷で長い一生を送りたいのか？」

若者は夢うつつにこたえた。

「ぼくは高い山での生活を選ぶ。たとえそのため、つかの間に命が消えようと。」

その時から、彼の生活は山々のものとなった。暗い森、岩、万年雪が、彼の家、頂の輝きは彼のものだった。

歳月が流れて、羊飼いが静かなカールで彼を見つけた。夏の陽が、雪崩れた雪のデブリから、ためらいがちに死者の体を開放したのだ。

若くして山で遭難死した大島亮吉も愛唱したというマイエルの詩には、魔神への憧れがある。高木先生がマイエルのドイツ語の原詩を愛読していたことは疑う余地がない。

林：高校時代に『日本アルプスの自然』という名著が出て、その序文にマイエルの詩がのっていた。

山で危険な局面に至ったとき、つき進むべきかそれとも退くべきか、友人とよく議論したものだった。その友人は昭和 31 年の冬、前穂高岳奥又白谷松高ルンゼで岸本卯三郎さんと共に雪崩で遭難してしまったが、マイエルの本はいつかドイツ語の原書で読みたいものと思っていた。

大学に入って図書館でマイエルの原書を探したがなかった。4 年生のとき高木先生の研究室に行ったらドイツ文学の井上増次郎教授（旧制松本高校教授）がおられて、マイエルの『行為と夢想』原書を借りることができた。一年かかっても 1/4 も読み進まない。ある日、高木先生から「林君、井上先生の本を僕に貸せ。君の力では何年かかっても読めんぞ。」とマイエルの原書を取りあげられ、内心ホッとした記憶がある。

私は理学部で先生の研究室のある文学部とは同じ御影学舎であったため、よく先生の研究室に出入りし、エミール・シグモンディの『山の危険』やノブレス・オブリージについて話を聞いた。

ボリビア遠征のリーダーシップ問題は 3 年間誌上論争が続いて後味の悪い結末になった。高木先生の教えであるノブレス・オブリージについて会員全員の意見を聞いてほしかった。そうすればもっと高尚な結末になったのではないか。

ノブレス・オブリージ

司会：半世紀前のボリビア遠征のリーダーシップ問題が一時期私たちの山岳会を揺るがしました。リーダーの責任、義務とは何か。リーダーの高貴で孤独な責任、**duty** とは一体いかなるものなのでしょう。福本さん、チャカさん直伝のノブレス・オブリージについて聞かせてください。

福本：山を通じて高木先生に教えて戴いたことが、50 年たった今も私の行動規範になっています。三回生でリーダーになった時、指導者としての心構えとして、「ノブレス・オブリージ」という言葉で、リーダーとして部下に対する責任を説かれた。一例を挙げると、夏山合宿の前にあいさつにお伺いした時、「福本君、合宿の前半は雨が続くだろう。梅雨明けの第一日目は快晴になる。その時君は部員に、即日出発せずに、寝袋を干し、テントサイトの整備を命令できるか。」とたずねられた。そして「一週間も停滞の続いた後で、それは勇気のいることだ。血気にはやる若い部員は、君を意気地なしと非難するかもしれない。しかし長雨の後、山は浮き石だらけである。一日待って、落石がおさまってから登るのが、理に適っている。勇気を持って停滞を決める。それがリーダーの務めだ。」と御託宣をいただいた。

「リーダーとは、全知全能を預けて、部員の生命の安全を考えねばならない。情に流されず、私情に溺れず、冷静に状況を判断しなければならない。前進より撤退の決定は十倍も勇気がある。進むときは、皆もついてくるが、撤退となれば、いろいろと後で非難されることも多い。しかし登山中に状況の変化があった時、パーティーの能力を考え、危険と判断したなら、勇気を持って撤退しなければならない。」「その場に当たって、指揮官は逡巡しては駄目だ。もし間違っていて、後日その原因を追及し、次につなげればよい。」

二十歳前半のしかも登山歴二年のリーダーに「ノブレス・オブリージ」を教えられた先生の慧眼には、古希を過ぎた今、改めて頭が下がります。私のアイデンティティを形成した言葉です。小さいながら会社を経営する上で、また、人生を生きていく上でこの言葉ほど、私の心の支えになったものはありません。

Nobless oblige を辞書で調べると、ノブレスは高貴な身分の人、オブリージは義務を負うことを意味している。私も人生の終わりに、トラファルガー海戦で見事に、スペインの無敵艦隊を殲滅し、そして戦死したネルソン提督のように、「I have done my duty.」とかっこよく言って、次世代にバトンタッチすることを夢見ています。

高木先生の印象

川越：昭和 35 年入学。私は宮崎県の生まれで、高木先生のおじいさん高木兼寛さんが生まれた高岡町の小学校に通った。ここには薩摩藩の関所があった。

日向の国で一番偉い人は神武天皇で、三番目に偉いのが宮崎神宮の基礎を築いた兼寛さんということになっている。

私も 60 才を過ぎてから信さんらとパタゴニアに行き、コロニア氷河の末端に立ってアレナレス峰を見てきた。金はかかったが満足している。

高田：昭和 36 年入学。高木先生は大学祭や六甲台のコンパのときの記憶しかないが、高木語録とか神話を聞いて魅力的な方だと思っていた。円満字さんの本を読んで整理できた。高木先生の追悼集は『山と人』第 8 号として、昭和 40 年 12 月に発行された。没後 3 年たった。

この追悼集にのせるため「高木先生と山岳部」というテーマで東西で座談会が開かれた。大阪では靱公園スポーツマンクラブで、円満字、金井、森田以下 22 名、東京では前田、豊田以下 6 名が集まった。私は現役マネージャーとしてその記録をまとめた。編集後記に高田誠さんが次のように書いている。

「山と人、この命題こそ高木アルピニズムを象徴するものではないだろうか。部報『山と人』が続くかぎり高木精神の灯をともし続けたいものである。」

有馬：昭和 37 年入学。高木先生には入学してコンパでお目にかかった程度で、そのままタヒチに行ってしまった。先輩からいろいろ先生の話聞かされ、上の世代がうらやましくて仕方ない。円満字さんの本を読んで、高木家は鹿児島と縁があることを知り、鹿児島もまんざら捨てたものではないと思っている。

六甲台の入学式で山岳部につかまった。「なに、鹿児島出身？黒江さん（六さん）に挨拶していけ」と山岳部の部室に連れて行かれ、反抗のいとまもなく入部させられた。前年に薬師岳の大遭難があり、両親が反対したが、リーダーの鷲尾さんが両親に手紙を書いてくれてなんとかおさまった。一年の夏山合宿で大きな荷物を背負って北アルプスの稜線を歩いていたら、同じく大きな荷物を背負った他大学の新入生が青息吐息でしごかれている。えらいところに入ったと思ったが、うちはバテたら上級生が荷物をかついでくれた。

2 年前、大腸ガンで死にかけたが、スタミナで何とか乗り切って又山に登れてる。山岳部でしごかれたおかげと感謝している。

坂西：昭和 40 年入学。入学して住吉寮に入った。同室の中園に勧められ 5 月の連休登山に行った。山岳部長は西村先生で、副山岳部長が後にカナダ・ユーコン学術登山隊（1968 年）を率いられた中西哲先生（教育学部長）だった。中西副部長から高木先生の魅力的な登山家としての話を聞いた。奥さんはミニスカートだとか、ヨーロッパでもてたのは高木先生だけだとか、先生はタヒチで暮らしてるだとか、いろんなニュースも入ってきた。「山岳部はすばらしい」と思って入部した。

井上：昭和 41 年入学。高木先生を知らない世代として一言。先輩から高木先生の多面的な魅力についていやというほどテントの中で聞かされ、一言でいえば「怪物」だと思って

いた。

高木先生の「山の危険」という論文には感動した。東大の先生が主宰する失敗学会で、「やってはいけない失敗、山の遭難」というテーマで30分程スピーチした。高木説を援用、「客観的危険 die objektive Gefahr」と「主観的危険 die subjektive Gefahr」についてしゃべったのだが、えらい奴だと学会の理事に推された。山岳部は偉大な人が出てくるところだと思う。

山田：昭和49年入学。今日参加の皆さんから見れば、ひよこの年代です。高木先生が亡くなられたとき、小学2年生で先生は父親より上の年齢になる。今日は年休をとって出席した唯一の現役世代です。4年生のとき大阪市大の人が剣で遭難した。真砂沢で会った救助隊の人が僕らのテントを見て「神戸大か、高木正孝やな」と声をかけられたのが印象的だった。なぜ「平井一正」でないのかと思った。

円満字さんの本を読んでやっと高木先生のことを系統的に分かった。今日の諸先輩の話はためになり面白かった。会費1万円の値打ちはある。

パタゴニアのチャカさん

司会：昭和43年に岩波書店から発行された『パタゴニア探検記』は戦後登山文学の傑作として、世代を越えて読み継がれてきました。もはや戦後探検記の古典といってもいいでしょう。パタゴニア探検はわが山岳部、山岳会のパイオニア・スピリットの原点となったのはもとよりのこと、わが国の登山探検史に大きな足跡を残したことは間違いありません。25才でパタゴニア探検行を共にされた森田さん、パタゴニアのチャカさんについて聞かせて下さい。

森田：日本・チリ合同パタゴニア探検隊の大きな特徴の一つは、日本とチリの隊員が対等の立場で行動するということであった。実際問題としてはヨーロッパアルプス、ヒマラヤ等を含め国際的な登山経験豊富な高木先生とその参謀役であった円満字隊員が探検隊をリードして行ったが、それでも対等の立場という基本精神は十分生かされていたと思う。

しかし考えていただきたい。登山のやり方だけでなく大きく言えば人生観、価値観、文化の全く違う日本とチリの登山家たちが、前もってのオリエンテーションも何もなくいきなりパタゴニアに行って、未知の大氷河を通りアレナレスに登るという極限状況の中で一緒に行動するというのがどんなことであるのか！

大事なことだったのは、双方の隊員が共同してコロニア湖をゴムボートで何遍もオールを漕ぎながら荷物を背負って運び、同じテントで寝泊まりし、同じ食事をし、或いは危険なセラックス地帯を双方の隊員が入り混じってザイルで結びながら行動している間に、お互いに気がつかない間に一緒に苦勞し危険をともにしたことによる友情と連帯感が段々強くなってきたことだ。

しかし、なんといってもリーダーとしての高木先生の存在が大きい。隊長だった田中薫先生も追悼文に書いておられたが、高木先生はチリ人の隊員やその周囲の人たちから大変尊敬され頼りにされていた。先生がドイツで身につけた特異な魅力ある人柄、それにやはりヒマラヤの洗礼を受けた山男の権威で、かなりわがままなチリ隊員たちも、山に入ってから高木先生の意見に服し、指揮に従うようになっていった。

アレナレスの登頂が成功し、キャンプを次々撤収し、コロニア氷河の末端を過ぎた所にある BC2 に全員がそろって集結した 3 月の夜、久しぶりに下から運ばれてきた新鮮な肉や野菜を食べ、全員が探険の目標を達成した後のおいしい食事の喜びに浸り、キャンプファイアーを囲みながら歌を歌った。双方の気持ちがぴたりと一致しているのを皆が感じたと思う。今でも当時のことを思い出すとチリの隊員たちはいい奴だったなと思う。

アレナレスの頂上目指して必死になっていたとき、こんなことがあった。チリの連中は、キャンプで休むときはみんなで歌を歌って楽しんでいる。「こいつらなんや、必死さが足らん」とハラが立ったが、そういう価値観もあるのだ。ひょっとするとチリ隊員のほうが正しいのではないかと思えるようになった。

最近日本でも国際交流の大切さが言われているが、私見ではその際一番大切なことは自国の（或いは自分の）価値観、考え方、文化に固執せず相手のそれを理解してやることだと思う。

あれから 22 年後の 1980 年から 90 年の間に、私はアフリカのナイジェリアで計 2 回通算 7 年間繊維の合弁会社の経営をやったが、その時パタゴニアでのカルチャー・ギャップの経験が仕事や生活の面で非常に役に立ったのは言うまでもない。

第四部 終章

謎の失踪

円満字：おそらくチャカさんの謎の失踪について話をするのは今回が最後の機会となると思うので、その経緯から始めたい。

チャカさんの失踪は昭和 37 年（1962）8 月 10 日の朝日、毎日、神戸新聞各社の朝刊に大きく報道された。神戸新聞特派員である壇上隊員がこの第一報を神戸大学に送った。神戸大学は神戸新聞と共同で南太平洋学術調査隊をマルケサス諸島に派遣していた。学者 3 人組の高木、石川、杉之原隊員たちは先遣隊としてマルケサス諸島のファッツヒバ島に先に赴き神戸新聞記者壇上、福本および梶木ドクターはタヒチで取材活動をつづけていた。このタヒチ残留組に船会社から「高木隊員が 8 月 6 日午前 4 時半ごろ突然汽船から姿が見えなくなり行方がわからなくなった。船ではあらゆる方法で捜索に努めたが、発見できなかった。」との連絡が入った。この当時、タヒチー日本間の電話回線は通じてなく、タヒチー現地間は船の無線以外に通信方法がなかった。タヒチ残留組もこの情報の信憑性がつかめず、必死になって船会社に詳しい情報をもとめた。高木隊員の乗船していたシャルロッ

ドナルド号（326 トン）船長から第二報が入った。次のような意外な内容だった。「高木氏はカヌーでひとり本船にやってきて、トランクとリュックを持って、乗船を依頼した。翌日われわれは彼の頭がかなり混乱していることを認めた。そしてアツオナに寄港した際、左手首をみずから切ったので、陸に連れて行き手当てを受けた。そのあと再び乗船、8 月 6 日午前 2 時半アツオナを出港、ところが午前 4 時半にはデッキに高木氏がいることを当直者が見かけたが、その直後から姿が急に見られなくなった。われわれはただちに停船。4 時 45 分から 6 時 15 分まで、海岸に沿って探したが見つからなかった。」ドナルド号の船長は自殺をほのめかしている。到底信じられる情報ではなかった。神戸大学ではただちに教授会にはかり事故対策委員会を組織し、とりあえず加藤文学部長を現地に派遣した。加藤文学部長は 2 週間タヒチに滞在し壇上隊員とともに情報を集めたが、ドナルド船長が発信した情報以外に何も決定的な情報はなかった。そして 1 年経過後フランス官憲により高木氏の死亡確認書が発行され、高木助教授は「事故による死亡」として処理された。私たちはただ茫然としているだけだった。現地に出かけたい気持ちがあったが、当時の社会的事情では許されることではなかった。うろうろしているうちに時間がたち御影の公会堂で葬儀の集会が行われた。

それから 40 年の日時が経過した。私も現役を引退し暇な時間が持てるようになった。そしてチャカさんのことを記録として残したいと思い、彼の生涯を調べ始めた。東京では豊田君、関西では金井、直木君たちに協力していただいた。私たちの青年時代を夢中にさせた登山をリードしたチャカさんの生き方を後輩に伝承したいという願いがあった。チャカさんの知人を探して話を聞かせてもらった。まず南太平洋調査隊でチャカさんと同行した杉之原先生にお会いした。学術調査隊に出発するまえのチャカさんは張り切っていた。新聞のインタビューでも「いくつかの心理テストをしてポリネシア人のパーソナリティーを調べたい、同時に人類学的な調査もしたい」などと語っている。

ところがファッツヒバ島に到着すると途端に元気がなくなった。二人の学者先生は集まった村人たちと言葉の勉強をしているのに、チャカさんは隣の部屋でごろごろ寝ているだけで調査に全然興味を示していなかった。現地の村人たちは 3 人の日本人が珍しいので大勢の人が宿舎に朝から詰め掛けていたらしい。そして数日がたち、彼らを運んだドナルド号が再びタヒチへの帰路、ファッツヒバに立ち寄った際、チャカさんは突然タヒチに帰る」と言い、荷物をまとめて乗船した。理由もいわないし、引き止めるすべもなかったと杉之原先生は私たちに話された。

チャカさんの親友田口二郎さんの夫人エルナさんは園城寺礼子さんを私たちに紹介してくれた。園城寺さんは学生時代からチャカさんを崇拝し文通していた。そしてチャカさんがパタゴニア探検から帰国し東京に数日滞在していた時再会した。以来「心の友」として文通を始めていた。ハワイとタヒチから数通の手紙が来ていたが、食事のこととか、散歩したことなど他愛のない話ばかりで、深刻な内容は全然見られなかった。

チャカさんは 8 月 3 日夕刻突然「帰る」と言い出し、8 月 6 日未明に行方不明になって

いる。8月4日から5日に手首を切って手当を受けている。どうも自殺を考えた様子である。私たちの知っているチャカさんの行動とはとても信じられない。しかしチャカさんの行方不明は事実として否定しようがない。私はチャカさんの魔神を思い出した。彼は登山の動機を「魔神的な衝動」と説明していた。生命をかけて頂上を目指す人の心の中には常識を超えた不可解な衝動がある。魔神の誘惑によるものとは理解できない。私は聖書の豚の話を出す。サタンが豚に乗り移り、豚の群れが湖に飛び込んで死ぬ話である。私はサタンの存在を信じている。おそらくチャカさんにもサタンが移ったのだろう。永遠の謎である。

未知を求めて

司会：未知の小惑星イトカワを目指した探査機はやぶさの奇跡的な地球帰還物語は、記憶に新しいところです。

人間の探究心には限りがありません。科学や学問、スポーツや登山の分野において、人類は未知への探求をくり返してきました。未知を求めるこの遺伝子は、パタゴニア・アレナレス峰からその後の神戸大学山岳部、山岳会に脈々と受け継がれ、それはヒマラヤのシェルピカンリ、クーラカンリ、そして昨年の東チベット・ロブチン峰へと花ひらいていくのです。

高木先生は、『パタゴニア探検記』の冒頭にこう記しています。「未知を求めた先覚者たち、開拓者たちの運命は悲劇的だ。だが、その人たちこそ、結局は、人類の進歩に貢献することが大きかったのだ。」と。このことばは、私たちに勇気を与えてくれます。先生自身にも悲劇的な最後が待っていたが、悲劇は勇者にしか起こらない。

「未知を求めて遠く旅する者に、神はそのパラダイスを開く。」これはコーランにあることばだそうです。未知を求めて遠く旅しつづけたチャカさんに、神々はそのパラダイスをきっと開いたに違いない。そう確信して、私たちの終生の師であるチャカさん・高木先生への感謝と敬意をこめて『高木先生を偲ぶ会』をここに終了します。高木先生、ありがとうございました。

以 上

第五部 年表 高木先生が生きた時代

	西暦	日本と世界の歴史	西暦	高木正孝先生の略歴
大 正 時 代	1904	日露戦争		
	~05		1913	大正2年3月12日東京都港区麻布東鳥居坂町14番地において出生
	1910	韓国併合	1925	成蹊高等学校尋常科
	1914	第一次世界大戦	~30	
	~18		1930	成蹊高等学校文科乙
	1917	十月革命、ソビエト政権樹立	~33	
昭 和 時 代	1919	ベルサイユ条約調印	1929	1月東吾妻登頂、8月聖沢より聖岳、9月小樽山より奥千丈国師岳、12月白馬大雪溪で敗退*
	1921	榎有恒アサヒ-東山稜初登		
	1923	関東大震災	1930	3月八方尾根から唐松・五竜、猿倉から白馬・槍温泉*、5月毛渡沢から谷川岳、芝倉沢から谷川岳、7月穂高・潤沢
	1929	世界恐慌 フアンズムの台頭	1931	1月白馬、3月唐松・五竜・白馬、5・6月谷川岳・芝倉沢、一の倉沢、7月笠岳より槍岳、8月明神・奥穂高、10月谷川岳陶の沢
	1932	五・一五事件	1932	1月富士山、5月千の倉より万太郎山、谷川岳、6月一の倉、7月一の倉より奥壁初登頂、成蹊虹芝寮完成
	1933	ヒトラー首相就任	1933	東京帝国大学文学部哲学科
			~36	
			1936	東京帝国大学大学院
			~38	
			1933	3月谷川岳一の倉登攀*、7月谷川岳、8月穂高・槍、12月谷川岳
			1934	3月谷川岳・滝沢、8月谷川岳、12月谷川岳奥壁登攀*
			1935	7月カネ里合宿、9月谷川岳、12月国後島チャップリ遠征（東大）支援
	1936	二・二六事件	1936	3月白馬南股小屋合宿（東大）
		立教大学ハンガコト初登頂	1937	専修大学予科講師
	1937	盧溝橋事件（日中戦争開始）	1938	フンボルト財団奨学金でドイツ・ベルリン大学留学
	1939	第二次世界大戦	1939	カイザー・ウィルヘルム研究所研究員
	~45		1943	カイザー・ウィルヘルム研究所助手兼副所長
	1941	真珠湾攻撃	1944	カイザー・ウィルヘルム研究所同上辞任、スイス日本公使館勤務（陸軍武官室付き）
			1944	ベルリン市ベルン大学付属植物園、動物心理学研究員
			1939	3月グリンデルワルト物語*
			1940	ドイツ・オーストリア山岳会、登山指導者講習会参加
			1941	8月キッツシュタイン・ホルン、グロックナー山群縦走
			1944	8月メンヒのノルン・ユンゲフラウ縦走
	1945	ポツダム宣言受諾（太平洋戦争終結）	1945	7月オーベルカマーヘル・ホルン、マッターホルン
			1945	8月ウェーターホルンの北壁*

昭和時代	1945	国際連合成立	1947	ベルリン市ベルリン大学付属植物園研究員辞任
	1946	天皇人間宣言 日本国憲法公布	1948	2月アメリカ合衆国経由で帰国
	1947	アンナプルナ初登頂（フランス隊）	1948	東京慈恵会医科大学予科講師 東邦医科大学予科講師
	1949	中華人民共和国成立		東京大学医学部付属脳研究所研究員
	1950	朝鮮戦争始まる	1950	同上退職（予科廃止のため）
	1951	サンフランシスコ条約、日米安全保障条約調印		東邦大学理理学部教授兼薬学部勤務（心理学及びドイツ語講座担当） 名古屋大学文学部講師（非常勤）
			1951	戦後の欧州学会視察のため渡欧 ～52
	1952	日本山岳会マナス踏査隊	1952	8月～12月ヒマラヤ、マナス偵察のためネパール滞在
	1953	日本山岳会マナス第一次隊	1953	1月神戸大学理学部助教授任命
	1953	エヴェレスト初登頂（イギリス隊）	1953	3月～6月ヒマラヤ、マナス登山のためネパール、インドへ出張
			1953	10月神戸大学山岳部部長就任
			1954	4月神戸大学文学部助教授任命
	1956	日本隊マナス初登頂	1954	奈良女子大学文学部非常勤講師 ～56
	1957	ソ連人工衛星スプートニク打上げ	1957	パタゴニア探検のためチリに出張
	1958	神戸大学パタゴニア探検隊アレクシス峰初登頂	～58	
	1958	京都大学隊チョコリサ初登頂	1962	6月南太平洋諸島学術調査隊に参加
	1959	キューバ革命		6月10日羽田空港出発 ハワイ向け
	1960	60年安保紛争、新安保条約自然成立		6月14日ハワイ・ヒレ
	1961	柏鵬時代（大鵬、柏戸横綱昇進）		7月11日ヒレをシャルロット・ド・ナルト号約300トンでファツバ島へ向け出発 7月19日ファツバ島到着
	1962	キューバミサイル危機 ケネディ大統領暗殺		8月2日ド・ナルト号が帰途ファツバへ寄港、午後7時ごろ高木隊員が一人で乗船。 8月3日ヒバ・オア島向け航行
	1964	東海道新幹線開通 東京オリンピック		8月4日午前11時45分ヒバ・オア島アツナ港到着。高木隊員は午後上陸、左手首に怪我して帰船。 8月6日午前2時アツナ港を出た船はハイアパ港沖に午前4時40分頃到着。高木当番の船員が高木隊員の不在に気づき午後4時50分に船長に報告。午前4時30分頃左舷を散歩中の高木隊員が目撃されている。船の位置は陸から400メートル、海上はおだやか。 8月7日船長は無線で死の本社とムクハ島の行政長官に連絡。これが日本に報道された。
				*印：創文社刊アルプ選書 高木正孝、渡辺兵力共著『垂直と水平の道』所載

2007年(平成19年)
8月号(No. 747)
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価1部 150円
URL●http://www.jac.or.jp
e-mail●jac-room@jac.or.jp



高木は1913年、祖父を慈恵医大の創設者とする家系に生を得る。成蹊高校時代から谷川岳岩壁登攀で活躍。東大を経てベルリン大学に留学。戦時下のドイツ、スイスで氷河技術を学び、本場のアルピニズムを習得する。

戦後帰国し、気鋭の心理学者と

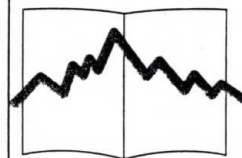
岩波書店『パタゴニア探検記』は戦後登山文学の傑作として、世代を超えて40年近く読み継がれてきた。その著者・高木正孝とはいかなる人物か。



2007年3月
ポイジャー社理想書店刊
B6判 384頁
頒価 3015円(送料込)

『登山家高木正孝——その人生とアルピニズム』

円満字正和・著



図書紹介



2007年(平成19年)
8月号(No. 747)
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価1部 150円
URL●http://www.jac.or.jp
e-mail●jac-room@jac.or.jp

して神戸大学に赴任する。

戦後の国家的壮挙であった日本山岳会のマナスル登山では、先遣隊として中心的役割を果たした。

神戸大学では若い山岳部員の育成に努め、その成果は1958年、日本チリ合同パタゴニア探検隊アレナレス峰初登頂として結実する。

本書の著者は当時29歳で、参謀役としてパタゴニア探検に参加し、高木と6カ月間行動を共にした。

チリ隊員との心理的な葛藤、猛烈な蚊との悪戦苦闘、氷河上の困難なルート探索など、本書では『パタゴニア探検記』とは違った視点で高木の躍動する姿が生々しく綴られている。

高木の死はまったく予期しない場所、南太平洋上で起こる。マルケサス諸島で学術調査中の高木は、1962年8月6日、突如としてスクーター船から姿を消すのである。著者は八方手を尽くして失

踪の原因に迫ろうとするが、謎は深まるばかり。

高木の49年の生涯は波瀾に満ちみち、まことに並々ならぬものがあった。

旧友・田口二郎は、高木を評している。

「ある社交パーティーで、デイナージャケットを着こんでくつろいでいるチャカ(高木の愛称)を見てそれを自然と思うし、その翌朝、同じ本人が橋の下で浮浪人と枕を並べているのを見ても不思議とは思わない。そういう男だったよ」

高木は孤高の放浪者の一面をもっていた。高木の生涯は、二十世紀を生きた高貴で魅力ある行動者、思索者の一典型として普遍性をもっている。

本書はアルピニズム論としても、人間論としても興味の尽きない評伝となっている。

*問い合わせ先はポイジャー社
(TEL 03-5467-1464)

*注文先はコンテンツワークス
(TEL 1020-298-956)

(岡市敏治)